

「世界に果てなんてない！」

第3章 青年海外協力隊～マラウイ編～

これまでのエッセイで、東ティモール、カンボジア、タイの話を書いてきました。今回は私が青年海外協力隊で派遣されたアフリカのマラウイ共和国について、書いていきます。

ご存じの方も多いと思いますが、青年海外協力隊とは、独立行政法人国際協力機構（JICA）で実施している、途上国へのボランティア派遣事業です。派遣期間は基本的に2年です。

青年海外協力隊以前に途上国を訪れた経験では、長くても1か月程度でした。つまり、これまでの経験の中で最も長い時間を現地で過ごすこととなります。長い時間を現地で過ごすことで、現地の人々について見えてくるものはあるだろうか、そんなことを思いながらマラウイへ赴きました。



マラウイの中学・高等学校での授業

一 学校で生徒たちと

マラウイでは中学・高等学校で数学の授業を行うボランティアを行いました。その最初の日、これからどんな2年間が始まるのだろうと、ドキドキしながら学校へ行きました。

その日はホールで朝礼が行われ、私の紹介も行われ、校長先生から自己紹介をお願いされました。生徒たちがこちらに興味津々といった感じで見ています。私は「Muli bwanji? (How are you?)」とマラウイの言葉であるチェワ語で挨拶をしました。

すると、生徒たちから歓声が上がりました。「Ndi li bwino, kaya inu? (I'm fine. How are you?)」と大きな声で応えてくれました。その後もチェワ語で自己紹介をすると、外国人がチェワ語を使っているのが嬉しいのか、あるいは面白がっているのか、私の言葉1つ1つに歓声が上がりました。



授業に取り組む生徒たち

私は日本で言えば中学3年生の生徒たちに、数学の授業を行いました。内容は日本と重なっていることが多かったです。生徒たちは教科書を持っていないので、それも加味して

授業を考えなければなりません。基本的にやる気のある子が多くて、今思えば拙い授業だったと思いますが、真剣に聞いてくれました。

純朴な生徒が多かったように思います。例えば、授業中に課題を出して、問題を解けた生徒にノートを持ってくるよう指示を出します。そして、ノートを持ってきて正解だった生徒に丸をつけます。私が中学の頃を思い出すと、丸をもらってそのまま席に戻るだけだと思うのですが、マラウイの子たちはガッツポーズをとったりして喜びます。さらに、花丸やコメントを書くと、喜びは最高潮になります。そんな、素直な子たちが多かったです。

一生徒の学校生活

私の学校では給食もありました。メニューはマラウイの主食であるシマ（トウモロコシから作る）と菜っ葉の塩茹です。このメニューがほぼ毎日繰り返されます。また、廊下では近所の人がお肉やお魚、あるいは大豆肉（マラウイでは多く流通している）のおかずを売りに来ます。それをお金のある子は買っていました。



給食を楽しむ生徒たち

給食を食べる場所は自由で、生徒の好きな場所で食べていました。

学校行事は日本に比べると少ないですが、卒業式は盛大に行われました。この日は朝から教員と下の学年の生徒たちで準備が行われます。式の入場は明るい音楽が鳴り、ダンスをしながら卒業生は入場します。式が始まると、明るい歌を踊りながら歌い、卒業証書も明るい雰囲気の中で渡されます。日本で多い厳粛な卒業式とは異なります。



卒業式の様子

お昼になると給食があり、卒業式の特別メニューです。普段のシマと菜っ葉の塩茹ではなく、ライスとチキン、そしてデザートまでつきました。午後になると、ダンスパーティーが行われます。在校生

だけでなく近所の子もたちも集まってきて、みんなで踊って卒業を祝います。

先生たちも気さくな方が多かったように思います。よく、アフリカの先生はやる気がない

という言説もありますが、少なくとも私の周りではそんなことはなく、熱心な先生が多かったです。もちろん、やる気のない先生もいましたが、給与が何か月も支払われていないなど、話をすれば何かしらかの原因があったように思います。よく夜ご飯に誘ってもらって、同僚の結婚式に何度か呼ばれたこともあります。マラウイの結婚式は、卒業式と同じでダンスがメインで明るい雰囲気で行われます。私がこれまで行った結婚式は、学校の先生のものであったせいか、学校のホールを貸し切って行われていました。なので、生徒たちも集まってきます。



同僚の結婚式

独特なのは、会場の前方に箱やザルが置かれています。最初は「あの箱は何に使うのだろう」と疑問でしたが、それは式が始まりすぐに分かりました。式が始まり音楽が鳴り、みんなでダンスをします。そしてダンスをしながら、その箱の中にお金を入れていきます。日本で言えば、「ご祝儀」のようなものです。あまり畏まることはなく、みんなで楽しく過ごす結婚式でした。

ーマラウイからの救いの手

マラウイは世界の中で最貧国の1つとされています。私がこれまで訪れた国々のなかでも最も経済的には厳しい国でした。でも、これまで書いてきたように、マラウイの人々は明るく生活していました。マラウイの人々は自分の国のことを「warm heart of Africa (アフリカの温かい心)」と呼び、そのことを誇りに思っています。その名の通り、温かい人が多かったです。



マラウイの生徒たち

そのことを強く感じた出来事を書きたいと思います。

2011年3月11日、東日本大震災が起きた時のことです。東日本大震災は遠くマラウイまで大きなニュースとして伝わりました。先生たちからは、電話がたくさんかかってきて「お前の家族は大丈夫か？」と心配してくれました。また、情報を入手した生徒たちから「日本は大丈夫？」とたくさん声をかけられました。そして、幾人かの生徒が「日本を応

援したい！」と言って、日本への応援メッセージの書かれた手紙を持ってきてくれました。その数は 30 を超えました。

私が中学生の頃を思い出すと、外国で何かあってもここまでのことが出来ただろうかと思えます。ニュースなどで海外のことも聞いていたと思うけど、行動までに移したことは皆無でした。日本という遥かに遠い国のことを思えるマラウイの生徒たちに感動をしました。手紙を受け取った時、生徒たちに「日本のことを思ってくれてありがとう」と言ったところ、こんな答えが返ってきました。



メッセージを書いた生徒たち

「困っている人を助けることは当たり前ですよ」

その生徒のごく当たり前でシンプルな言葉に私は心を打たれました。困っている人を思いやり、自分に出来ることを行う。そんなマラウイの生徒たちは立派な人間であると思っています。

そんな「当たり前」と言われることほど、難しいことはないのかもしれませんが。家族を大切に、友人を大切に、人への感謝を忘れない、相手の気持ちを考える、困っている人に手を差し伸べる……。こういった小学校の頃言われたような当たり前のことを、大人でも出来ない人は多いし、私もまだまだ未熟なままです。

—最後に

3 回のエッセイに「世界に果てなんてない」とつけたのは、一般的に「世界の果て」と呼ばれる場所に住む人々から、私は多くのことを学んだからです。多くのことを学ばせてもらった彼らに対して、「世界の果て」なんていうのは失礼だと思っています。そして、私には「世界の果て」がなくなりました。どんな場所にも、それぞれの歴史や文化を持った人々が暮らしており、そこに人としての差、考え方の差なんてありません。自分が世界の中心にいて、その中心の考え方が最高のものなのだと思うことは傲慢なのでしょう。

そして、生きていく上で大切なのは世界のどこにいるかが問題なのではなく、今いる場所で自分がどうあるかが問題なのだと思うようになりました。世界に果てなんかなく、世界のどこも価値のある場所であり、あとは自分がどうするかが大切なのだと思います。

この文章を読んでくれた方が、何かしらかを感じて頂けたならば幸いです。(終了)